

野菜」といった複合経営が主体となっている。したがって、水稻の作型の分化に伴って施設野菜の作型も分化してきた。現在の主な作型を種類別に示したのが図6である。

たとえばキュウリの促成栽培は、中期水稻との組み合わせで、10月上中旬に播種され温風暖房機の導入により栽培が増加しており、トマトの促成は早期水稻との組み合わせで

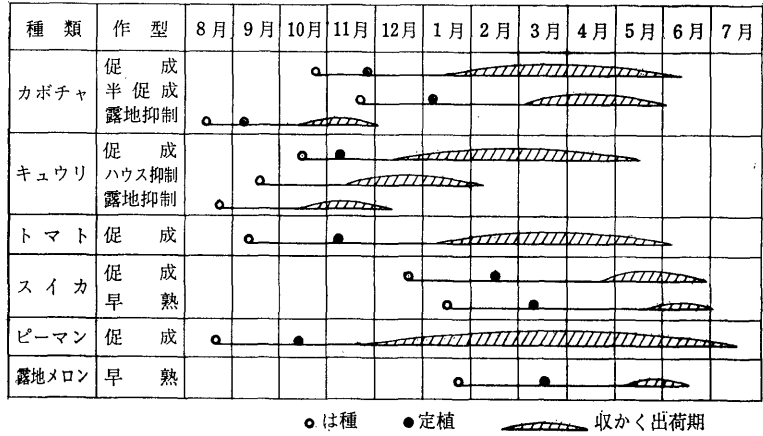
9月上旬に播種され、カボチャの促成半促成は、普通水稻の跡作として、それぞれ10月中下旬、11月下旬に播種される。

また、早期水稻の普及にともない抑制果菜の栽培が増加し、輪栽の面で安定した生産体系が組立てられており、露地抑制キュウリは8月下旬、ハウス抑制キュウリは9月中旬、露地抑制カボチャは8月中旬に播種される。

ハウス抑制キュウリは、水田では跡作にカボチャを導入する2作型が、また畑地帯では、スイカを作付する2作型が分化し、生産量、収益性ともに安定してきた。

これらの作型に使用される主要品種は、カボチャが宮崎早生1号、キュウリが促成、久留米落合

図6 宮崎県における主要野菜の作型



H型、抑制、長日落合2号、トマトは強力五光および東光、スイカが天竜2号、こだま、ピーマンがさががけみどりとなっている。

おわりに

以上のように、宮崎県における施設園芸は、沿海地帯の水田裏作を主体として多彩な作型を形成しており、今後ますます発展するものと考えられるが、そのためには、農家の生産意欲の向上と生産施設の近代化、技術の改善などによる経営規模の拡大とともに、集団産地の育成、生産組織の強化、共販体制の確立などきめ細かい施策が必要であって、今後一層の奮起が望まれる。

転作予定面積は？

～ 作物別、年次別の動向 ～

ことしも、米の作付調整がきびしく進められるが、農林省では、作物別に、年次別に、どの程度の面積の転作を予定しているのだろうか？この線にそってまとめられたのが別表である。

なお、46年度の転作面積15万haは、46年度

の新規転作面積9万7千haに、45年度の転作面積を加えたものである。(ただし、数字は概数を示したものであるから、内訳の計は、必ずしも総計と一致しない。

また、各転作作物の収益性については、9頁に掲載した。

作物別、年次別転作予定面積 (千ha)

区 分	46年	47年	48年	49年	50年
飼料作物	30	34	37	40	44
永年性作物	6	6	6	6	6
大豆等豆類	45	34	34	34	34
野 菜	10	10	10	10	9
そ の 他	6	6	6	6	6
計	97	89	92	95	99
累 計	150	239	331	426	525